

水使用

日本への食糧輸入に伴って生じる輸出国の水使用量が、1年間の合計で約42・7立方キ・メートル(427億リットル)に及ぶことが、東京大生産技術研究所の沖大幹教授らの研究グループの推計でわかった。これは国内の食糧生産に使う年間農業用水量(約55立方キ・メートル)

今回、研究グループは、輸出国の食糧生産実態に即し、河川からの取水、貯水池の操作による引き水の量などを細かく計算。日本に輸入される主要な小麦やトウモロコシなどの穀物類、牛肉や豚肉などの畜産物類計8種の生産に使われる水の量を「ウオーター・フットプリント」として求め直した。

427億トン

輸出側・年間

その結果、総量は約42・7立方キ・メートル。その供給源を見ると、全体の約83%(約35・4立方キ・メートル)を降水が占める。残りは引き水で、枯渇が予想される地下水は、全体の約6・8%(約2・9立方キ・メートル)に達していた。特に最大の輸入相手国である米国で、地下水の依存度が高いことがわかった。

の8割に相当する。使用量の1割近くは、輸出国で枯渇が懸念される地下水と見られ、将来的に日本の食糧確保に大きな影響を及ぼす可能性が浮き彫りになった。

沖教授らはこれまで輸入される食糧の生産に必要な水の量「バーチャル・ウオーター」(仮想水)を年間約62・7立方キ・メートルと推定したが、日本で生産した場合の数値を用いて計算したため、必ずしも輸出国の実態が反映されていない

ある」としている。沖教授は「有限な地下水がかなりの割合で使われており、これが枯れてしまうと価格高騰などにつながる恐れがある」としている。

輸入食糧に

かった。